魔法少女リリカルなのは～遥かなる悟空伝説～

群雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは～遥かなる悟空伝説～

【Ｎコード】

Ｎ１１２４ＢＡ

【作者名】

群雲

【あらすじ】

一星神龍との戦に決着をつけた悟空が神龍と一緒に消えた先は・・・そんな物語始まります

異世界（前書き）

どうも、新参の群雲ですこんにちはッス
とりあえず悟空、異世界突入編です

異世界

第一話　異世界

「これ以上ドラゴンボールを使わせる訳にはいかない」
世界の危機を救った戦士たちに目の前な緑色の巨大な龍は告げる。
いままでことあるごとにその龍の持つ奇跡と呼べる力に助けられ頼ってきた、
それがこんな銀河系未曽有の危機に陥るとも知らず
「さぁ、いくぞ孫悟空」
そしていざなう、これまで五十以上の年月にて幾度も世界を救ってきた男、孫悟空を
「あぁわかってる、じゃあオラ行ってくる」
「父さん行くってどこに！」「カカロット…貴様！」
困惑する仲間たちをよそに男は目の前でその巨大な頭部を差し出している緑色の龍「神龍」にむかっていく
「バイバイみんなー」
神龍の頭部に乗っかるとそのまま手を振りながらまるで『また明日遊ぼうな』といわんばかりな笑顔で神龍とともに大空へと消えていった。
「なぁ神龍、オラちょっと寄り道してぇんだけど」
そう神龍に『頼み』を言った悟空はそのままかつて競い合った友、そして殺し殺された友に会う。
そしてまた空を昇っていく、雲を超え、神の神殿のある天界を超えた頃
「神龍ってあったけーなぁ、オラなんか眠くなっちまった」
だんだんとぼやけていく視界、徐々になくなっていく身体の感覚に悟空は神龍に乗ったまま目を閉ざした

鳴海市のとある公園
時刻は朝5時を過ぎた頃、日が昇り始め、あたりを薄く照らし始めた頃だった
毎日の日課としてランニング途中の公園で稽古をしていた親子がいた
一人は大学生くらいの若い青年、高町恭也
もう一人はその父親である高町士郎である。
「父さん、次こそ一本取ってやるからな」
「はは、まだまだお前には負けられんからな手加はなしだぞ！」
「その自信も今日までだぜ父さん」
「よし、いくぞ！」
いざ始めようとしたその時である、急にあたりが暗くなったのである
「なっ、どうなってんだこれは朝だってのに真夜中みたいに暗くなっちまった」
「きょ、恭也！あれを見ろ！」
あたりが真っ暗闇に包まれたことに驚いた恭也だったが、それとは別のものに驚いた士郎がそれをかき消すかのように恭也を呼んだ
龍がいた。西洋の物語に出てくるような胴体に手足があるというのではなく、胴体はとても長く東洋の伝承にあるような巨大な緑色の龍であった
「・・・・・・・」
さっきまで稽古だと意気込んでいた恭也は目の前に広がる非現実な光景に言葉を発せずにいた
士郎の方も言葉すら出なかったものの恭也よりは冷静であった、彼は見逃さなかったのだ目の前の龍からなにか小さいものが下りていくのを。それを見つけた瞬間、龍は激しい閃光を放ち消えてしまった
「父さん龍が・・・」
「あぁ消えてしまったな・・・」
そう返した士郎は突然歩き出した、なにかに引き込まれるように龍

が居たほうへと

異世界（後書き）

え～やっちゃいました
とりあえず悟空たちのからみは二話
戦闘は三話からッス
ではではまた

交差する（前書き）

とりあえず勢いにかまけて第2話
とりあえず話すすまねぇ

交差する

第二話　交差する

公園の裏にある雑木林の奥
「待ってくれよ父さん」
「・・・・」
高町父子の二人はひたすらに進んでいた、正確には黙々と歩いていく父である士郎に息子の恭也がついて行っているのだが。
「父さん！」
「・・・・・・・」
先ほどから恭矢の呼びかけにも無反応の士郎は周りを見渡しながら数歩あるいた後その足を止めた
「・・・・・・・恭也」
「なっ、なんだよ」
恭也は先ほどから返事がなかった父親から急に声をかけられ戸惑ったがすぐに持ち直し
「さっきの龍なんだが、あのとき小さい光のようなものが龍の頭から降りていったような気がしたんだが・・・おまえもなにか見なかったか？」
「？なにかって、そんなもの・・・・！！」
ガサガサ
首をかしげながら返答に困っていた恭也であったが後ろの茂みから物音が聞こえ、すぐさま臨戦態勢に入った。
「もしかして父さんが言ってた奴か！？突然夜になったりいきなりでけえドラゴンが出たり、もう何が出てきても驚かねぇからなぁ！」
構えを取りながら朝から起こったき奇妙な出来事にやや愚痴るように言い放ち今現在も音のする茂みを睨みつけている
「恭也！少し冷静になりなさい」

そういう士郎だが息子と同じく先ほどの体験が多少なりとも尾が引いているのだろうか、眼光は普段の稽古以上に鋭くそこに纏う空気もかなり張りつめたものだった。
ガサガサガサガサ「・・・・・・・・・」
音は激しさを増していき二人の緊張の糸は徐々に張りつめていった
そして
ふわふわ
「「・・・・・」」
ふわふわ
「「・・・・・・・・は？」」
現れたものに二人はそろってまさしく文字どおり「氣」の抜けた声を出した
そこには一人の少年が『あお向けに横たわっていた』、
気を取り直して高町家の大黒柱である士郎がその少年を「観て」みようと思った

歳は背格好から見て１０歳前後だろうか末子の「なのは」とあまり変わらないくらいだ。

胸元の〇に亀の字が入った山吹色の変わった道着、ここら辺の道場ではまず見ないだろう。

そしてそのわきには少年のものであろう赤い棒と中に赤色の星が４個入ったオレンジ色の水晶が転がっていた
ここまではいい、そうここまでならただの迷子として警察に届けを出すなりすればいい
だが問題はこの少年の「状態にある」
今この少年は『あお向けに横たわっている』のだ、この状態でなぜこちらまで近づくことができたのか、それは
「父さん、俺はさっきからの騒動は実は夢なんじゃないかって思う

んだが」
「恭也・・・父さんも同じことを考えたところだ、だが実際に起きてしまってるんだから仕方がない」
二人の目線は同じところを向いていた、少年の背中・・・・・・いや今少年を支えているものにくぎ付けになっていた
「「・・・・・・」」
先ほどと同じようにだが違う意味で生唾を飲み下した二人だがついに動いた
「「・・・・・・ふわふわだ」」
そう仰向けになって眠っている少年を支えている『雲』にふたりは同時に吸い込まれるように触れてみたのだ
「どうなってんだ？綿みたいにやわらかいのにそれでいてある程度の弾力がある」
右手で押したり引いたりを繰り返す恭也
「黄色い雲なんて見たことも聞いたこともない・・・いやでもどこかで？」
考え込みながら両の手で撫でている大黒柱の士郎、二人が雲について考えてると突然雲が動き出した
二人が見ている中、その雲は少し離れた位置まで移動すると全身をくねらせるように動いていくすると『ドサ！！』という音を立てて少年を地面に落とした
「何してんだあいつってこら、やめろって」
状況がいまいちつかめない恭也、だが雲がいきなり恭也をその全身を使って少年のほうへと押し出していく
「おいやめろって！くそなんでこんなに気持ちいんだぁぁ押すなぁ！！」
「そうか、そういうことか」
目の前のやり取りを眺めていた士郎は雲の行動にある一つの答えを導き出した。ならすることは一つ、士郎は雲の前まで近づきそこで片ひざを着き雲の上にやさしく手を置くと

「君はこの子を私たちに託そうとしているんだね？」
士郎はまるで子供をあやすように声を出した。
雲は士郎の周りをグルグル回るともとといた位置で数回跳ねた、それを見た恭也は
「なんか犬みたいなやつだな、まるで雲には見えない」
などと微笑みながら雲を撫でていると
クォーン　バヒューン
まるでよろしくといった感じに雲は遠くの空に飛んでいく、それを眺めた後ふたりは少年を見つめて
「しかたない、あの人懐っこい雲に免じてとりあえず家まで運ぶか」
「父さん」
すっかり癒された二人はその少年を運んでいく

なのはＳＩＤＥ
わたし、高町なのは９歳。私立聖祥大付属小学校の３年生、昨日友達のアリサちゃんとすずかちゃんとでケガをしていたフェレットを動物病院に連れて行ったんだけど
病院の先生から飼い主さんのことを聞かれたときにみんなで探してあげられないか、それがだめなら私たちのだれかが飼ってあげられないかという話になったのですが、アリサちゃんは犬を飼っているからだめで
すずかちゃんは猫を飼ってるからだめみたいで。なのでわたしは今日お母さんたちに相談してみることにしました
「おはよう」
「ギャー」
二階の部屋から一階に降りたとき、道場のほうからものすごい悲鳴が聞こえてきました
急いで駆け付けてみると

「なんだおめぇぜんぜんよわっちいなぁ」
「ぐっく、こんなはずじゃ」
「まったく、油断しているから情けない」
お父さんとお兄ちゃんとあと・・・
「ん？おめぇだれだ？？」
知らない男の子がいました

ＳＩＤＥ　ＥＮＤ

時はさかのぼり、なのはが起きる１時間前
「「ただいま～」」
高町家に父子は帰ってきた
兄、高町恭也の背中には例の雲から預かった少年が背負われていた。
父、高町士郎が扉を閉めると家の奥からパタパタと音が聞こえてくる
「お帰りなさい恭也、あなた」
迎えた人物は高町桃子、このいえの中心人物といっても過言はない
というくらいの権力を持つひとである、二人を出迎えた桃子であった
たが恭也の背中を見ると
「あらあらあらあら♪」
なにやら嬉しそうに笑い始めた

士郎はことの顛末をある程度かいつまんで説明した。巨大な龍のこと、黄色く人懐っこい雲のこと、そしてこの少年を家で引き取らないかというはなしを
「とにかくまずはこの子が起きてからなのだがな」
士郎は少年のいる道場を見つめながら言う、なにせまだどんな子なのかどころか名前すらわからないのである。
「う～ん・・・・ん？あれ、オラどうしたんだ？なんか夢ぇ見てた気がしたんだけどなぁ」
目を覚ました少年はあたりを見渡して

「どこだ？ここ」
一面木造の部屋なのだがやけに広く見慣れない部屋に首をひねっていると
「おっ目が覚めたか！」
「ん？」
一人の青年が部屋に入ってきた、恭矢である。恭矢は少年に近づき目と目を合わせた
「よう、気分はどうだ？」
「おう、悪くねぇぞ」
「えーと俺の名前は恭也、高町恭也おまえは？」
「オラ、孫悟空だ！」
「へ？」
順調な会話のキャッチボールだったのだが少年・・・悟空の名前を聞いた恭也の言葉が止まった
「すごい名前だな」
「あっ父さん！」
ついで入ってきた士郎の言葉で恭也の止まった時間は動き出した
「きみは悟空君というんだね、すこし話したいことがあるんだがいいかね？」
「ん？オラ別にかまわねぇぞ」

道場に悲鳴が上がるまであと３０分

交差する（後書き）

悟空の装備品なりなんなりと突っ込みどころありますが
４話か５話くらいにほのめかしとくんで今のところ説明なしです
とりあえずこんな文章ですが感想待ってます
ではではまた

とりあえず飯だ（前書き）

一応予告した戦闘回です・・・ イチオウ
えっと悟空となのはが遭遇したってことで今回からあとがきを悟空となのはの掛け合い風の次回予告にしてみようかなと思います
不愉快だと思った方はどんどん言ってくださいねやめますから（泣き）
ではどうぞッス

とりあえず飯だ

第三話　とりあえず飯だ

「では改めて自己紹介から行こうか」
道場に入ってきた士郎は悟空の目線近くまでしゃがみこむとにこやかに笑った
「私の名前は高町士郎、この家の主だとおもってくれ」
そういうと恭也のほうをみると
「さっきも言ったが俺は高町恭也だ」
二人は言い終わると悟空のほうを向く、すると悟空はおもむろに立ち上がり張り手の形にした右手を顔の位置まで上げ
「オッス、オラ孫悟空だよろしくな！キョウヤにシロウ」
すこしだけ発音がずれた感があるが屈託のない笑顔で二人に返す悟空、それを見届けた二人はお互い見やっていた
（（初対面でいきなり呼び捨てか・・・））
二人はそう思ったのである
「じゃあ悟空君きみは「そういえばお前なんであんなところで倒れてたんだよ？」おい恭也」
もう少し話に弾みをつけようとしていた士郎は息子のせっかちな質問にすこし頭を抱えた
「ん？オラ目が覚めたらここだったぞ」
「じゃあその前はどうしていたのかな？」
「えっとピッコロ大魔王を倒して、神様んところで～ん？」
ここに来る前のことを思い出そうとする悟空だが、神殿での出来事あたりから頭にもやがかかったような感覚を覚えて頭を捻る。そんな悟空を見た士郎は
「思い出せないなら無理をしなくてい「父さん！こいつ今とんでもないこと口走らなかったか？！」恭也いい加減にしなさい」

悟空の口から出た大魔王に神様という単語に力のいっぱい突っ込んだ恭也を咎めた士郎だが、その内心では驚愕が渦巻いていた
「恭也、今朝のことを思い出してみるんだ」
「・・・たしかに今朝のあれはすごかったけどさすがに神様だなんて」
今朝みた巨大な龍を思い出し今までの自分の中の常識の幅をかなり広げた恭也だが、さすがに神や魔王という単語には正直、素直には呑み込めない
「ん？なんだキョウヤ信じらんねぇんか？」
「そりゃあなさすがに無理だろ、もし本当なら悟空おまえはその大魔王より強いってことだろ？悪いがとてもそんな風には見えないな」
えっなんで？という顔をする悟空にいやいやないないという風に返す恭也だが次の悟空の言葉でその表情を一変させる
「じゃあいっちょオラと戦ってみるか」

「ではこれより時間無制限一本勝負を始める、先に相手に一撃を入れたほうが勝ちだ、ただし急所は狙わないこと」
悟空の提案により急遽はじまった恭也と悟空の試合だが当の本人である悟空は木刀を構えた恭也を見るとおもむろに右手を背中に伸ばす・・・・のだが
「あれ！ない！ないないないない！！」
「？？おいどうしたんだよ悟空」
「なぁ如意棒しらねぇか？如意棒！これっくらいの赤い棒なんだけどよぉ」
背中に回した右手を二回ほど空中で握っては閉じる動作をして突然騒ぎ始めると自分の両腕をいっぱいに広げては目の前の恭也に尋ねる
「如意棒？」
そんな中士郎は悟空の如意棒の発言に首をひねっていた
「あっ！あったー」

道場の奥に立てかけてあった赤い棒きれを見つけた途端走りだし右手でそれをつかむと
「よっ！ほっ！はっ！あーらよっとぉ」
自分の目の前で棒の中心を起点にして回転させると次に両腕でもって右に半回転させて左に持って行っては半回転させ、仕上げに頭上で回転させた後に左手を前側に右手を自分の右胸の前に持っていくと戦闘態勢を整える
「それが如意棒か？」
「おう、そうだぞ！じっちゃんがくれたんだ」
「・・・・よし、では二人とも準備はいいかな？」
「「おう！」」
「では・・・・・はじめ！！」
いま、当人たちの知る由ではないが異世界の住人の戦いがはじま『ぐぉぉ！！！』
った瞬間におわった
「ぐっく、こんなはずじゃ」
「なんだおめぇぜんぜんよわっちいな」
「まったく油断してるから情けない」
試合が始まった瞬間、まず恭也は悟空との間合いを測り実力を見る意味もこめ、牽制に突きを放つ
この間わずか０．８秒

対して悟空は慣れ親しんだ自分の相棒ともいえる得物に『あの』キーワードを込める
「伸びろ如意棒―」
前に突き出していた如意棒はそのまま吸い込まれるように恭也の腹に
「ぐぉぉ！！！」当たった
ちなみにこの間わずか０．６秒である
この出だしの差により突きのために一歩踏み出した恭也の腹に棒を設置しておく構図となり、結果

腹を押さえて悶絶している恭也ができあがった
その光景をみて眉間に少しだけしわを寄せながら首をかしげる悟空
だったが、いきなり道場の入り口のほうに首をまわした
「もう起きたのか、おはようなのは」
「おはようお父さんにお兄ちゃん・・・・・・ えっと」
「おっす！オラ孫悟空だ」
「えっと、わたし高町なのはっていいます」
士郎とその横で片膝立ててうずくまっている恭也に挨拶をしたなの
はだが、見ず知らずの少年に戸惑っていると向こうからの自己紹介
に釣られてしまう
「おい悟空！なんだその棒は！！反則だろ」
「っ！どうしたのお兄ちゃん？」
突然怒鳴りだす恭也に思わず身を引いてしまうなのは、このとき恭
矢の顔が少し申し訳なさげになった
「恭也、悟空君とりあえず『ぐぎゅるるるる～』何の音だ？」
『ぐごりゅりゅりゅりゅ～』
先ほどよりも重低音がかかった唸り声に怪訝な顔をする士郎と恭矢
であるが、なにか怪物の鳴き声を彷彿させる謎の音になのはは少し
腰が引けていた
「「「いったいなんなんだ？」」」
三人が声をあわせて音の出処をさぐっていると
「うぅ、もうだめだ」
いままでの元気の良さと打って変わって床に座りだし足を放り投げ
る悟空、それを見た士郎はどこかケガでもしていたのかと思い声を
かけようとするが
「オラ腹ぁ減っちまったぁ！！」
「「「あらら」」」
あまりにも能天気な悟空の一声により三人はズッコケてしまった。
「まったくしょうがない、いろいろ聞きたいことがあるがとりあえ
ず朝ごはんにしよう」

「ほんとか！いやっほ～」
ズッコケたままの士郎の朝食宣言に悟空はその身に余る喜びを表すように飛び上がっていた
それを見ながら三人は立ち上がると飛び跳ねながら小躍りしている悟空を連れて、道場を後にした

とりあえず飯だ（後書き）

悟「オッス！オラ悟空」

なの「わたし高町なのは、いまのところ極々普通の小学3年生」

悟「目ぇ覚ましたら全然しらねぇところでオラびっくりしたぞぉ」

なの「わたしも突然知らない男の子がいてその子が急に怪獣みたいなおなかの音をだすからびっくりしちゃた」

悟「ははは！わりぃわりぃ、ところでよぉ次回はついにあれだな？」

なの「うん！ついにわたしが・・・・」

悟「ついにめしの時間だ～やっぱりめし食わねぇと力（りき）入んねぇかんな！」

なの「ちがうよ～次はわたしが」

悟「次回！魔法少女リリカルなのは～遥かなる悟空伝説～第４話なのは危機一髪あらわれた怪物」

なの「あ～！勝手に進めた！！」

悟「ところでよぉなのは？イタチって結構うめぇんだぞ！」

なの「その子はだめぇ！！」

なのは危機一髪あらわれた怪物（前書き）

悟空の二人称をとりあえず漢字の人はかたかな
それ以外はそのままで行こうと思います
ではではどうぞ

なのは危機一髪あらわれた怪物

第４話　なのは危機一髪あらわれた怪物
高町家　リビング
ここはいま一つの戦場と化していた
響き渡る轟音
燃え盛る炎
飛び散る火花
どれをとっても決して一般家庭の、それも朝食時に会っていいものではない…はずである
「おはよーってなにこれ？」
リビングに入ってきたのは高町家長女である高町美由希、普段の彼女はもっと早くに起床しているはずなのだがある理由でついさっき支度を済ませたのである
「おはよーおねえちゃん」
「おはよう美由希」
「お！ようやく起きたか美由希」
「・・・・・・・・・・」
上からなのは、士郎、恭也の順で挨拶が返ってくる。だが現在リビングにいる人数は美由希を入れて六人、そう後二人ほど足りないのであるが今の美由希には些細なことだった今一番その思考を占めているのは
「・・・・・・・『グゴォォォォォォォ』」
テーブルの奥でうつ伏せになり指ひとつ動かさずに怪物のような騒音を絶賛演奏中の少年であった
「悟空君、もうすぐ出来上がるからがんばって！」
「オラぁもう限界だぞぉ・・・・」
「わ！しゃべった」
キッチンで調理中である高町家オーナーシェフである桃子は悟空を

励ましながら普段出さないような速度に技術そして大量の材料を思う存分駆使していた。
「ていうかお母さん朝からこんなに作ってどうしたの！？」
朝食、というより晩飯の量ですら遥かに凌駕している食卓に並んだ食事に美由希は思わず声をあげた
「お母さん、悟空君のおなかの音を聞いた途端にいきなりこうなっちゃって」
「おなかの音？」
『ＧＯＯＯＯＯＯＯ』
「今のがそうなんだけど」
「え？」
なのはが美由希にこたえるとうつ伏せになっている少年、悟空から戦闘機ばりの轟音が鳴り響いていた
「こいつの腹ん中はいったいどうなってるんだか」
朝からの騒動のせいか割と冷静な恭也と
「おかーさんがんばれー」
先ほどまでの雰囲気が嘘のように新婚気分バリバリの士郎であった

「「「「「「「「「いただきまーす」」」」」」」」」
ついに完成した割と・・・結構・・・・かなり豪勢な食事に最初こそ胃もたれを起こしそうな顔をしていた高町兄妹だったがそれをすぐにぶち壊す光景がテーブルのおくにあった
がつがつがつもりもりもりごきゅごきゅごきゅ
「ふふぇーふぉふぉふぉうぉふふぇー」
「ごっ悟空君、ちゃんと呑み込んでからしゃべりなさい」
「んぐっんぐぷはー！モモコーおめぇ料理うめぇなー」
「あら♪ありがとう悟空君」
食べながらしゃべる悟空を注意する士郎に料理をほめられご機嫌な桃子、だがそれを眺めてるテーブルの向こう側の兄妹はというと

「「「なんていう食欲」」」
目の前で繰り広げられている惨事に思わず箸を止めるのであった
ちなみに食い終わった後の「腹八分目ってところだな」の発言には
だれも突っ込まなかったとか

「「「いってきまーす」」」
食事が終わり高町兄妹がそれぞれ学校に行った後、リビングには士
郎と片付けを終えた桃子と腹を風船のようにふくらませた悟空がいた
「さて悟空君、改めていろいろと聞きたいことがあるのだけどいい
かい？」
「ん？なんだ？」
話を切り出した士郎であったが何を聞けばいいのか一瞬考え
「まずきみはどこに住んでいたんだい？」
とりあえず無難な質問にしてみた
「オラか？オラぁ『パオズ山』ってとこに住んでた」
「「パオズ山？」」
まったく聞いたことのない山の名前に士郎と桃子は怪訝そうな顔を
した
「おうっそうだぞ！そこでじっちゃんと二人で暮らしてたんだ」
「えっ！おじいさんとふたり？ほかにご家族の方は？」
じっちゃんと二人という言葉に士郎は驚き
「？オラ家族いねぇぞ、オラが赤ん坊のころ山に捨てられてたのを
じっちゃんが拾ってくれたんだ」
続いて発せられた言葉に二人は凍り付いてしまった。そんな二人を
見た悟空はというと
「そんなことよりさぁキョウヤたちはどこ行っちまったんだ？」
先ほどそろって出かけた高町兄妹の行方をきにしていた、そんな『
なんでもない』様子の悟空を見て桃子は
「お、おわぁ～くすぐってぇぞモモコ」

悟空を自分の膝の上に座らせて微笑みながら頭を撫で始め
「よし！」
それを見た士郎は意を決したように声を上げると
「悟空君、今日から君はうちの子だ！！」
そう高らかに告げたのであった

そして夜
嵐のような晩飯どきを乗り越えた高町家はもう皆が就寝の準備に入ろうとしていたのだが士郎の「みんなに大事な話がある」の一言でリビングに集合することとなる
フェレットのことで頭がいっぱいだったなのはもこれに乗じて・・・とは言わないまでもきっかけになればとリビングの椅子に座った
「じつは悟空君をうちで引き取ることになった」
士郎の一言に桃子と恭也は予想通りという顔を
「「えぇぇぇ～」」
残りの姉妹は二人そろって驚愕していた

なのはの部屋　この部屋の主はついさっきの衝撃発言のせいで失敗した作戦？についてなやんでいた
「はぁ～どうしよう、結局言えなかった」
ねが・・・・・すけ・・・・
「えっ！」
nがい・・・・・・・・・・・・・・・tけて
頭に響いてくるその声を聴いた途端、なのはは服を着替え始めた

リビング
「悟空くーんお風呂入っちゃいなさーい」
寝る前の修行と言っていつまでも風呂に入らずに型の修行をしていた悟空は桃子の勧めでいい加減終わりにしようとしてたときである

g・・・skt・・・・・・・お・・・・・・い
「ん？」
突然響いてきたこえに首を傾げていた

「はっはっはっは」
動物病院前　そこは昨日みたときと比べてとんでもなく変わっていた
敷地内の木は倒れ、地面はえぐれている
「はっはっはっは」
そして何より違うのは
「なんなのあれ～」
今現在全力疾走中のなのはの後ろを追走する黒い化け物がいるという点である
「あれはジュエルシードという石が周りの思念だけを取り込んで物質化したものです」
「わっっ！しゃべったー」
左手に抱えているこの間から気にかけているフェレットがしゃべり始めたことい驚いたなのはだが構わず話を続けた
あれに対抗できるのは魔法だけ、その力をなのはが持っていること、そして
「お願いします、力を貸してください！お礼はします必ずします」
「で、でもキャッ！」
話に集中していたなのはは派手に転んでしまった
そこを黒い化け物が見逃すはずもなく、爪の形をした腕ともいえないそれを
振り下ろした
「「！・・・・・・・・」」
もうだめだと目を閉じた二人だったが、いつまでたってもやってこない衝撃に閉じていた目を開ける、すると
「おめぇこんなとこでなにしてんだ？」
「ふぇ？」

山吹色の道着に赤い棒を握りしめ、黄色い雲の上に乗っかっている
今日から家族になった男の子が
手に持った棒で怪物の一撃を受け止めていた

なのは危機一髪あらわれた怪物（後書き）

悟「オッス！オラ悟空」

なのは「突然響いてきた声に導かれるように病院に行ったのはよかったんだけど」

悟「なのはって結構足遅いのな！ははっ」

なの「これでも早く走ってるつもりなんだけど」

悟「そうなんか？よし！オラが鍛えてやる、この甲羅を背負ってとりあえずはしっぞ」

なの「えぇ無理だよう！じっ次回！！魔法少女リリカルなのは～遥かなる悟空伝説～魔法少女誕生！！じゃあばいばーい」

悟「じゅえるしーどってうめぇのか？」

魔法少女誕生（前書き）

お待たせいたしました
ついに、ついに魔法少女が登場です
ええ、登場ですとも
活躍のほうはわかりませんが
ではではどうぞ

魔法少女誕生

第五話　魔法少女誕生！！
動物病院前
先ほどまでただの道路だったこの場所はすでに見る影はなく、ただの荒れ地とかしていた
そんな中
『ぐぉぉぉぉぉぉお！！』
一体の獣の雄叫びと
「悟空、君？」
一人の少女の不思議そうな声と
「なんだ？こいつ、イノシシかなんかか？うめぇといいけどなぁ」
明日の朝食の献立にイノシシを加えようとしている一人の少年の声が交錯していた

なのはＳＩＤＥ
わたしは今とっても信じられない光景を見ています、あのとっても怖い怪物の攻撃を
背格好がわたしとそんなに変わらないあの男の子、悟空君が足元にある黄色い雲に乗りながら両の手にもった赤い棒でやすやすと受け止めていたからです
「せぇーの！」
『ぐぎゃぁぁぁぁあ』
「わー！」
そして悟空君は両手に力を込めると一気に怪物を押し返してしまいました、そして
「なんだぁ？ぜんぜん大したことねぇなぁあいつ、それにやっぱりなんか不味そうだ」

「えぇ～！」
どこかつまらなそうに『食材を吟味』している悟空君に思わず声をあげて驚いてしまいました

ＳＩＤＥ　ＥＮＤ

「・・・・はっ！そっそうだ！いまのうちにこれを」
「え？」
「あぁっ！イタチがしゃべったぁ！？」
「イタチ！？ちっちがいますよ！ぼくは」
しゃべりだしたフェレット（イタチ）に悟空はなのはと同じ反応をする
「悟空君！うしろ！！」
それをすぐさま否定しようとしたフェレットの声を遮るようになのはが悟空を指さすと
『がぁぁぁぁ！！』
まるで怒り狂ったようにこちらに向かって咆哮をあげる怪物がいた
「なぁおめぇよ？」
「な、なんですか？」
怪物のほうを向いた悟空は顔だけこちらに向けて
「あいつよぉめちゃくちゃしつこそうでよ、けどオラたち早く帰ぇんねぇといけねんだ
なんか考えがあるんだろ？やってみてくれよ」
「あるにはあるんですが、少し時間がかかってしまって」
「時間？んじゃあオラが何とかしてやるぞ」
「「えぇ！？」」
フェレットの時間がかかるという言葉に特に困った風には見えない軽い返事を返す悟空になのはとフェレットは本日何度目かになる驚きの声が上がる

「で、でも見たところ魔法の素質が全くないのにどうやって・・・」
「そうだよ悟空君あぶないよぉ！」
「あんくれぇの奴ならどおってことねぇぞ、じゃっ行ってくる」
二人の心配を余所に悟空は乗っていた雲から降りて持っていた如意棒を背中にしまうと
「またせたな、じゃあいっちょやっかぁ」
『ぐぉぉぉぉぉ！』
怪物に向かって構えをとった

「だだだだだだ」
『がぁぁぁぁ』
怪物に向かって走り出す・・・ いや突撃を仕掛けた悟空は、すかさず怪物の懐に潜り込み
両拳の連打を食らわせていく
思いもよらぬ攻撃の嵐のためか咆哮を上げる怪物は、体の一部を先ほどの爪よりもさらに鋭い鎌状に変化させると勢いよく振りかぶっていく
「だだだだだだっだりゃぁ！」
怪物の『変化』に気が付いた瞬間、悟空は威力をあげた連打を5，6発あてると両腕を引き
その勢いで右足を怪物の下から上に向けて放った
「「ふへぇ～はっ！」」
悟空の猛攻に目を奪われ言葉を失っていた一人と一匹は悟空の蹴りを見た瞬間に我を取り戻して
「これを」
「なにこれ、あたたかい」
「目を閉じて、心を澄ませて僕の言うことに続いて！」
赤い宝石を受け取ると言われたとおりに目を閉じるなのは、そこに
「おぉ～いまだかぁ～」

もたもたしているなのはに悟空は両手のひらを口の横に持っていき
呼びかけながら
怪物の攻撃を右に左に避け、隙あらば懐に潜り込み拳を2，3発当
ててはまた離れる作業を繰り返していた
「こいつ、殴ったところがまた元に戻っていきやがる」
怪物の身体が液状に変わったかと思うとまた元に戻るとまったく無
傷の姿に戻っていた、これを見た悟空は後ろに飛び跳ねて
「よぉ～し、ならオラのとっておき見せてやる！」

「よし、いくよ！」
「うん」
「我、使命を受けし者なり」
「われ、使命を受けしものなり」

「契約の元、その力を解き放て」
「契約のもと、その力をとき放て」
呪文を唱えると渡された宝石に鼓動が走り光が漏れる

「「風は空に星は天に」」

かぁ

「「そして、不屈の心は」」

めぇ

「「この胸に！」」

はぁ

「「この手に魔法を！レイジングハート、セットアップ！！」」

「Stend by raedy Set up」

瞬間、夜空に桃色の極光が駆け上る

「あれ？服が！それにこの杖」

「それは君がイメージしたものが具現化したものなんだ、それより早くあの人を」

「う、うん！」

めぇ

なのはは手にした杖、レイジングハートを握りしめて悟空のほうへ向かう、すると

「悟空君が光ってる！？」

「あ、あれは砲撃呪文！？」

目の前にいる少年は両足を曲げ踏ん張りがきく態勢になり、両手は何かを包みこむように後ろにいるなのは達のいるほうに持っていき腰の位置で固定している

そして青白い光が手の中に納まりきらずあたりを照らしていくと、両手を一気に怪物の方に向け押し出した

「波ぁぁぁああ！！」

「きゃぁ！！」

「わわ！」

『GAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA』

怪物に向かって背の問題上やや上に角度をつけて放たれた青い閃光は断末魔の叫びをあげる怪物を包み込んでいき

夜空を切り裂くように飛んで行った

「「すごい」」

「へへ！ブイブイ！！」

驚くなのはたち、それに向かって右手でブイサインをしながら笑っている悟空はさっきまで戦っていた人とは思えない笑顔だった
「そうだ、早くジュエルシードを封印しないと」
「あ、うん」
するとなのはは先ほどまで怪物のいたところまで行くとがれきの中に青い宝石のようなものがあった
「それがジュエルシード、いまはむき出しになってはいるけど早く封印しないとまたさっきみたいな怪物になってしまうから気をつけて」
「うん、わかった」
「へぇ～そんな石っころがあんな化けもんになっちまうんだなぁ」
フェレットの説明を聞き終えた二人は落ちているジュエルシードを見つめた、こんな小さな石があんな化けものになってしまうなんて不思議でならなかった
「じゃあさっきみたいに僕の言葉に続いて？」
「あ、はい！」
「「ジュエルシード、シリアル２１封印」」
［Ｓｔｅｎｄ　ｂｙ　ｒａｅｄｙ］
唱えるとレイジングハートから桃色の光がジュエルシードを包み込むすると激しく発光した後また元に戻った
「そしたら杖を近づけてみて」
「こ、こう？」
レイジングハートをジュエルシードに近づけるとそのままレイジングハートに吸い込まれるように消えてしまった
「あぁ石っころが消えちまったぁ！どぉなってんだぁ？」
後に聞こえてくるのは目の前の出来事に驚いている悟空の声と爆発の騒ぎを聞きつけたパトカーのサイレンの音だった
「も、もしかしたらここにいると」
大変なのではと思ったなのはだが急に腕を引っ張られる
「じゃあ帰ぇるか！いっくぞぉ」

「えっなに？え？え！？」
つかんだ腕を離さないまま急に飛び上がった悟空はすぐ横に浮いている『雲』に乗っかると
「いけー筋斗雲！！」
「きゃぁぁぁぁぁぁ」
海鳴市の夜空に小学３年生女子の悲鳴が響き渡った

魔法少女誕生（後書き）

悟「オッス、オラ悟空！」

なの「魔法少女としてジュエルシードを集めることになったわたしなのだけど、さっそく試練が」

悟「どうしたんだぁキョウヤ？そんな顔してよ」

なの「そしてすずかちゃんの家に訪れる最大の危機」

悟「ぐぎゅるるるぅ～」

なの「次回魔法少女リリカルなのは～遥かなる悟空伝説～第六話あなたのお名前は？　ご期待ください」

悟「こいつ、なにいってっかさっぱりわかんねぇ」

ＲＨ［Ｓｏｒｙ］

あなたのお名前は？（前書き）

休みが終わり、投稿速度が落ちるかもです

とりあえず恭也ファンのみなさんごめんなさい

では

あなたのお名前は？

第六話　あなたのお名前は？

高町家周辺「上空」
ジュエルシードの封印という大仕事を終えたなのはは悟空に引っ張られるままに筋斗雲の上に乗るとそのまま目を閉じて悟空にしがみついていた
「そういえば気になってたんだけどよぉおめぇなんていうんだ？」
「え、ぼくですか？」
「あ！そういえばわたしもまだきいてないかも」
筋斗雲を軽快に飛ばす悟空は自分にしがみついているなのはの肩に乗っているイタチ（フェレット）に顔を向けた
「そういえばそうでしたね、さっきの砲撃魔法やこの不思議な雲が気になってしまって紹介が遅れました」
そういうとフェレットは悟空となのはを見る、その眼の光は不安と希望・・・そして迷いが交じっていたように見えた
「僕の名前はユーノ、ユーノ・スクライア、スクライアは部族名だからユーノが名前です」
「ユーノかぁオラ悟空！よろしくなっ！」
「ユーノ君かぁ、かわいい名前だね」
「ど、どうも」
なまえをほめられたユーノだがその姿はどこか落ち込んでいるように見えた、そんなユーノを見ていたなのはは
「なのはだよ」
「え？」
笑顔でただ優しく名前をいうのであったなのはだがその小さい両手は悟空の山吹色の道着をつかんでは離さないでいた、そんな姿を見て
「その、僕が助けを呼んだせいであなたたちをあんな危険なことに

巻き込んでしまって・・・・」
非常事態だったとはいえこんな小さな女の子に頼ってしまわなければ自分の非力に落ち込んでしまう
「ほんとうにっわ！！」
「なんだおめぇ？落ち込んでんのかぁ」
なのはの肩に手を伸ばした悟空は黄色い獣を鷲づかみにするとそのまま顔の前に持っていき、にっ！と笑って
「過ぎたこといつまでもウジウジと悩むんじゃねぇぞぉ！つぎまたがんばりゃいいじゃねぇか」
「・・・・は、はい」
なのはと悟空の笑顔をみて胸のつかえが取れるようだったユーノであった
しばらくして

「ねぇ悟空君、お家についたんだしそろそろ降りようよ」
「ん？あぁそうだな」
悟空はなのはに促されると雲・・・筋斗雲を高町家の敷地内に降ろした
「けどよぉいいのか？」
「え、なにが？」
なにが悪いのかと逆に聞きたいくらいといったなのはだがその疑問はすぐに解消されることになる
「いやだってよう」
「おかえり」
「お、お兄ちゃん」
「こんな時間に何をしていたのかな」
悟空が説明しようとしたのだがそれを許さないといった感じに出てきたのは長男の恭也である
「キョウヤぁほれぇちゃんとなのはのこと連れ帰ってきたぞぉ」
悟空が任務完了の報告をするとそのままじっと恭也の目を見つめた、

すると恭也は軽い溜息をすると
「あぁすまないな悟空、それよりなのは、なにか言わないといけないことがあるんじゃないか？」
「あのぉ～、そのぉ、ご、ごめんなさい！」
「よし、よく言えたな！次からは黙ってないでちゃんと一言いうんだぞ、さぁ外は寒いから早く家の中に入りなさい」
困り果てたなのはの渾身のごめんなさいに少し甘めに叱ったのであった
そして筋斗雲から降りようとしている悟空を見ると
「悟空、ありがとな」
そういって悟空の頭をポンとなでたのであった

「じゃあ悟空君お風呂に入りましょうか♪」
「あっ！じゃあ私が入れてきてあげる」
帰ってきたなのはと悟空を迎え入れたのは桃子のこの第一声とそれに合わせて悟空の手を引きながらお風呂場に向かった美由希である、そして5分後
「キャーなにこれぇー！！」
悟空のデンブの「先にあるもの」を見て驚愕とも歓喜ともとれる美由希の悲鳴が高町家に轟くのであった

１０分後　美由希の悲鳴を聞きつけリビングにはユーノを含め全員集合していた、ちなみに連れ帰ったユーノなのだが悟空がユーノの首根っこをつかんで出迎えてきた桃子の前に掲げると
「モモコぉ！なのはがこいつ飼いたいってよ？」
の一言と「了承～」の二つ返事が返ってきたことにより無事解決していた
「ふぃーいい湯加減だったぞ！」
「悟空君、今朝見たときから言おう言おう思ってたんだけど、そのしっぽってアクセサリーとかじゃなくて・・・・」

風呂上がりの悟空が牛乳を片手にあおっていると高町家を代表して
一緒に風呂に入った美由希が震える指で悟空のしっぽを指さして
「おう、赤ん坊の時から生えてたってじっちゃんがいってたぞ！」
「「「「「へぇ～」」」」」
ユーノを含めた高町家の面々は目を丸くしながらひょこひょこ動く
悟空のしっぽをみていたなか
「あらあら♪」
桃子だけは一人何かを思いついたように微笑んでいた

就寝時刻　何とも急だった悟空の高町家入り一日目は最後の最後に
とんでもない問題が発生した
「なぁオラどこで寝ればいいんだ？」
そう、あまりに急な決定だったため悟空の寝る場所を決めていなか
ったのだ・・・ここまでは別に大問題ではないのだが
「仕方ない、じゃあ俺の「悟空君、わたしの部屋いこ！」へ？」
やれやれといった感じの恭也の俺の部屋来いよのセリフを上塗りに
してなのはが衝撃発言をする
「子供同士仲良しこよしってね！」
「まぁそれもいいか」
「あらあらなのはってば♪」
「・・・・・・・・・かは！！」
長女、父、母、三人が快諾する中・・・・・一人
「おい！まて！！なの「私の部屋二階なんだ、早くいこ！」はぁ！
！」
「そんな引っ張るなよぉ」
悟空の右手を引っ張るなのははそのまま二階の自分の部屋に消えた
「～～～～！」
あまりの展開に自意識を失いかけてる兄を置いて
二階なのはの部屋　いまここには

自分のベッドに腰を掛けたなのはとさっき桃子が持ってきてくれた来客用のふとんにあぐらをかいた悟空がいた
「ねぇ悟空君、ユーノ君、すこしお話があるんだけど」
「ん？どうかしたんかなのは」
「もしかして魔法のこと？」
「それもあるんだけど」
ベッドから身を乗り出したなのはは右の人差し指を口元に持っていくと
「悟空君とユーノ君のこときたいな！」
笑顔でふたりに告げた。そしてまずユーノが自身が別世界の者であること、自分のいた世界でジュエルシードが発掘されたこと、そして輸送中の事故でそれがばらまかれてしまいそれを回収に来たことを、説明が終わると
「～～きいろいわたがしぃ～」
「～～～まだくいたりねぇぞ」
ふたりはよほど疲れていたのかぐっすりと眠ってしまっていた
「そろって食べ物の夢だなんて・・・ふたりともありがとう」
そしてなのはの部屋から明かりが消えた

次の日　午前１０時２０分
今日は学校が休み、なのはは月村家にアリサと遊びに行く約束をしていたのだが
「あぁ～！寝坊しちゃたぁ！！」
昨日の疲れを若干残していたなのはは約束の１１時に完全に間に合わない時間まで眠ってしまっていた、ちなみに毎朝早くに起きている悟空はベッドから転がり落ちたなのはに抱き枕にされていて身動きがとれなかったとか
「どうしよう！どうしよう！」
「なぁ」

「たいへん！たいへん！」
「オラがなんとかしてやろうか？」
「え？」
完全にテンパっているなのはに悟空は笑顔で言うと
「筋斗雲やぁーい」
「えぇ！！」
なのはの腕を引っ張って
「いっけー」
「またこれぇ！？」
空のかなたに消えていった

月村家周辺上空
「なぁなのは」
「どうしたの悟空君？」
「大変なことをわすれちまってたぁ」
突然話しかけてきたやけにトーンの低い悟空になのはは恐る恐るたずねると
『ＧＯＯＯＯＯ』
「オラ朝飯くってねぇぞぉ」
「あ、あはははは」
この瞬間、月村家シェフたちの命運を秘かに心配するなのはだった

歩く戦略型兵糧壊滅機（悟空、一食抜いたオーバードライブモード）が月村家に到着するまで、あと３分

あなたのお名前は？（後書き）

悟「オッス、オラ悟空」

なの「あっという間にたどり着いたすずかちゃんのお家、だけど悟空くんのおなかは限界！」

悟「オラもう我慢できねぇ！！」

なの「やめてぇ机は食べ物じゃないよぉ！そんなとき近くにジュエルシードの反応が」

悟「ん？おめぇだれだ」

なの「おんなのこ？」

悟「次回ドラゴンボール　はるかな」

なの「悟空君！逆だよっ！！」

悟「わりぃわりぃ、次回魔法少女リリカルなのは～遥かなる悟空伝説～第7話　雷の少女登場！　オラはあいつと戦いたい、じゃあなぁ～」

なの「またねぇ～」

雷の少女登場！　オラはあいつと戦いたい（前書き）

みなさま！遅くなりました
やっぱアレっすね、仕事との両立は難しいっすね！

てなわけで、りりごく第7話どうぞ

雷の少女登場！　オラはあいつと戦いたい

第七話　雷の少女登場！　オラはあいつと戦いたい

月村家、海鳴市の郊外に位置するこの豪邸には二人の少女が窓の外を見て、その端正にととのった顔を驚愕に染めていた

「ねぇすずか、『アレ』なんだと思う？」

「さ、さぁ？・・・・」

窓のほうを指さしているアリサと、同じほうを見て後頭部に大きい汗のマークが見えるすずかのふたりは、窓をじっと見つめて

「「なんだろう？　あの赤い棒」」

そとに突然現れた赤い棒にそろって疑問符を

（来たときにあんなものあったかしら？）

（『いま見えた』のってもしかして）

方向こそ違っていたが浮かべていた・・・・・・・・・が

「お！ここだここだ」

「お、おはよ～」

「「え！！」」

赤い棒が光ると上から待っていた友達と見知らぬ男の子が降りてきた

「ねぇなのは、なんで棒高跳びなんてしたのよ」

「えっとねそれは～」

先ほどの出来事にあっけにとられていた二人を置いていきズカズカとはいってきた悟空と困り顔で一緒に入ってきたなのははまず二人に悟空を紹介した、その際に

「ねぇ？『これ』ってなに？」

と悟空のしっぽを指さして聞いてきたアリサに、なのははあわててアクセサリーだとごまかした、今朝のドタバタのときに桃子が

「ねぇ悟空君、これつけてみて？」

そういって悟空のしっぽに結んだオレンジいろのリボンのおかげでそれっぽく見えたのであった、桃子おかあさん万々歳である。そして話はなのはの登場方法についたなのだが

「ご、悟空君がいきなりやりはじめて・・・・ね」

かなり無理のあるゴリ押しを慣行していた

なのはが「このまま筋斗雲にのっていたらみんなびっくりするよ」という一言に「そっか？わかった」の二つ返事で着陸した悟空たちは月村邸の厳重なセキュリティをフルシカトするうえに門前の呼び鈴も鳴らさずに入ってきたために出迎がなくさらには目の前のドアは残念ながら子供であるなのはと悟空にはいささか高かったのである

「けっこう高ぇとこにいんだな～」

「どうしよう、手が届かないよぉあとすこしなのに・・・わぁ！」

困り果てたなのはだったが突然腕をつかまれ振り向くと、背にしていた赤い棒を地面に突き立てている悟空が左手で自分の腕をギュッとつかんでいたのだ。そして

「のびろぉ如意棒ー」
悟空が叫ぶと同時になのはの視界が上下にぶれた
勢いよく伸びた如意棒は一気に先端を地上7メートル付近にまで伸ばした、ちなみにその速さは一般人ならば目視不可能に近かった

「ごごごご悟空君いい行き過ぎ！！」
「あ！わりぃわりぃ、でもよほらあそこにいんのがなのはの友達だろ？」

そういって屋敷の二階あたりを指さしている悟空と

「こんなところからじゃよくわかんないよ～」
「悟空さん！はっはやく降ろしてください！」

窓しかみえない二階を見て、いきなり上空に腕一本で吊るされたなのはとユーノは半泣き半笑いの状態でいた

時間は二階の部屋に入ったところに戻り
【ねぇなのは、昨日の砲撃魔法といい雲といい悟空さんっていったい何者なの？】
【昨日からうちに住むことになったんだけど．．．．．わたしもよくわからない、わからないんだけど】

筋斗雲での移動中にユーノから教わった魔法、『念話』による悟空についての会話をしていた、その結果

【【とってもすごいってことだけはわか】】『ぐぅぅぅぅぅぅ！！！』

ふたりして同じ結論にたどり着いたその時だった、今まで忘れていたなのはだったがついさっきまでの重要事項を思い出した

「うぅ！」
「えっ！きみどうしたの？」
「ちょっとあんた大丈夫なの？」
（ご、悟空さん！？）

アリサとすずかそしてユーノは驚いていた、なにせいまのいままで元気だった目の前の少年が急におなかをおさえてうずくまったのだから
しかし

「オラぁはらへっちまったぞぉ！」
「「「あらら」」」

顔をあげた少年が言い放った一言に二人と一匹はずっこけてしまう

「えっと、少し早いけどお昼にしましょうか」

がつがつがつがつもりもりもりもりあむあむあむあむぼりぼりぼりぼり

にゃあ

一階リビング　ここにはさっきのメンツに加えてすずかの姉の忍とそのメイドのノエル
そしてすずかの専属メイドであるファリンが

「「「「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」」」」」

目の前の光景に思わず言葉を失っていた

「ふえぇ～ほへぇんひほふぉをひふへぇーほ」

「もう悟空君食べながらしゃべっちゃだめだよ？」

一人の少女、なのはを除いて

「なんて食欲なのよ」

「あんなにたくさんあったのに」

「の、ノエル？ちなみに何人分の食事だったのかしら？」

「なのは様が悟空様は１０人前は軽いとおっしゃっていたので」

「か、かるく２０人前です」

「「「「「・・・・・・・」」」」」

アリサ、すずか、忍、ノエル、ファリンは出された料理の７割を食い尽くした悟空をただじっと見つめていた

その頃キッチンのほうでは料理長らしき人物が天に包丁をかざして真っ白になっていたとか・・・・

「ふぃ～食ったぁ食ったぁ！あっそうだ、なぁすずかぁ？」

「え？どうしたの悟空君？」

満腹になった悟空はそのよく張った腹をさすりながらすずかの方を向くと外の方を指さし

「オラ外に如意棒を取ってくんの忘れちまったからよ、取りに行きてぇんだけどよ？」

「あ、そっか！ドアに手が届かないんだっけ？ノエルさんお願い」

「かしこまりました」
「ていうか如意棒って何よ？」

にゃあ　にゃあ

あっけにとられていたすずかは自分でも届かない玄関のドアのことを思い出し
アリサは悟空の口から出た聞きなれない単語に疑問符を浮かべていた

にゃあ　にゃあ　にゃあ

「というよりなんだかすごいことになってるんだけど」
「ん？」
「「「「「にゃあ～」」」」」
「うちじゅうの猫たちが集まってきてる！」

悟空が座っている椅子の周りにはいつのまにか猫があつまっていた
椅子をカリカリひっかいたりその場で寝そべっているものや、悟空のしっぽに飛びつこうと跳ねているものもいた

「じゃあオラ行ってくる」
「あっ悟空君？私も行く！」

そんなことに意を介さない悟空は、すずかにドアを開けるよう頼まれたノエルの後ろについて行くのだが

「「「「猫の大行列ができてる」」」」

猫たちは悟空の歩きに合わせるかのようにピタッと一列になって後ろをついて行く、ちなみにユーノは月村家に来たときに浴びたネコ

たちの熱視線に完全に腰が引けてしまい、悟空の頭の上に乗っかって「食われる・・・・・・喰われる!!」とブツブツと唱えていた。

「お、あったあった!」

「これが悟空様のお探ししていた如意棒というものですか?ですが・・・」

「ほぇ～あんなに長くなるんだ～」

「長くなる?」

外に出て目の前の如意棒に駆け寄った悟空は右手で握り、それなりの長さになっている如意棒に驚いているなのはと疑問符を浮かべているノエルを背にしながら

「もどれー如意棒ぉー!!」

「棒が縮んだ!?」

いきなり7メートルぐらいの棒が元に戻って驚くノエルだが、如意棒を元の長さに戻した悟空は突然林の方に視線を向け・・・・・走り出した

「ご、悟空君!ノエルさんわたし」

「なのは様、お嬢様たちには私からお伝えしておきますので」

「はい!いってきます!!」

二人を見送ったノエルは主である忍のところに行こうとするが

「その前に」

立ち止まり足元を見渡す

「「「「「「「「「にゃぁ～！」」」」」」」」」

「この仔たちをなんとかしないと」

悟空がいなくなり屋敷から出ることもできず、まるで「いかないで！」と阿鼻叫喚となっているネコたちはその後悟空が帰ってくるまでこうだったとか

林の中　なのはは走りだした悟空とその頭にのっかていたユーノの後を追いかけていた・・・・・・・いたのだが

「ぜっぜんぜん、おいつけっはぁはぁ、ないよ～！」

魔法少女になったとはいえ所詮はただの小学生、夢中になって走り出した悟空に追いつけるわけがなく

「悟空君まってぇ！！」

「ん？なんだなのはついてきたのか？」

叫びだしたなのはは止まった、ちなみにこの後「しかたねぇなぁ」と言われ悟空におぶられたなのはの顔は若干赤く染まっていたとか

「ねぇ悟空君どこに行くの？」

「むこうのほうでよぉ誰かがこっち見てたんだ」

「むこうってボクには何も見えないけど」

悟空の指さすほうに目をむけたが林が広がっているだけだったがそれでも悟空は走り続けて

「お！いたいた！」
「ほんとにいた」
「悟空さんの視力っていったい」
「だれ！！」

一際大きい木の上にいる少女は黒衣を身に着け背にはマントをたなびかせてなのは達を睨んでいる、その姿は見たものをそばに寄せ付けない印象を与えるものであった

「あれはもしかしてバリアジャケット！？」
「じゃあもしかしてあの子？」
「おめぇそこから降りられなくなったんだろ？いま助けてやるからまってろぉ」

「「あらら」」
「え？わたしは・・・その、ちが」
「おいっちにぃさんしぃ！」

悟空の発した言葉にコケが入り、黒衣の少女は一瞬でその鋭い雰囲気を崩し目の前で張り切って準備運動をしている少年に困っていた

「あ！そういえばさっきこれ見つけたんだけどよぉ、これってユーノが探してるやつだろ？えっと、じゅ？ジュエルミート？」
「「あ！ジュエルシード！！」」
「えっ！」

とてつもなくうまい肉の名前と間違えながら、なのはのほうにおもむろに差し出した右手には青い宝石が乗っかってあった
それを見たなのはとユーノは驚きの声を上げ

黒衣の少女は

「それをこっちに渡して！」

鋭くした目を暗く光らせながら悟空に言葉を発した

「ん？おめぇこれほしいんか？でもよぉ」

といいながらジュエルシードと黒衣の少女を見比べ、なのはの方を向き

「なぁユーノ昨日のなのはのあの姿ってよ、あれになると強くなるんだよな？」

「え？バリアジャケットのこと？確かに魔法が使えるから一般人に比べたら相当強いけど」

「そっかぁ、じゃああいつもすげぇ強えぇんだよな？」

ユーノから話を聞いた悟空はそのまま黒衣の少女に振り向く、ちなみにこの時の悟空の表情を見たユーノはのちに「お昼ご飯を目の前にした時とおんなじ顔でした」と語ったそうだ

「なぁ！」

「？」

「こいつおめぇにあげてもいいぞ！」

「え！じゃあこっちに」

「けどよ？」

「けど？」

悟空の『けど』という発言に首を傾げる黒衣の少女は次の悟空の言

葉に表情を真剣なものに変えた

「オラと戦ったらだぞ？」
「あなたと、たたかう？」
「あぁそうだ！オラ、おめぇとたたかいてぇ！」

今ここに黒衣の魔法少女と山吹色の少年拳士の戦いの火ぶたが、切って落とされようとしていた。

雷の少女登場！　オラはあいつと戦いたい（後書き）

悟「オス！オラ悟空！！」

なの「突然ジュエルシードを賭けてたたかい始めた悟空くんと謎の女の子」

悟「うひょーおめぇ速ぇーなぁ！」

なの「空を飛べない悟空君は次第に押され始めるのですが」

悟「よぉーし、こっからが本番だぁ！」

？？？「な、これは！！」

なの「謎の女の子にある技を使うのでした」

悟「次回　魔法少女リリカルなのは～遥かなる悟空伝説～第８話
スピード対スピード、発動！残像拳」

なの「またねぇ～」

スピード対スピード、発動！残像拳（前書き）

とりあえず今現在、原因不明の退行現象が発生してる悟空君（空を飛ぶのに筋斗雲をつかってるなど）はあの黒衣の少女とどう戦うのか

ではどうぞ

スピード対スピード、発動！残像拳

第８話　スピード対スピード、発動！残像拳

月村家敷地内奥

「本当にあなたに勝ったらくれるの？」

「ジュエルミートだろ？あぁいいよ！とそうだちょっと待ってくんねぇか？」

悟空はそういうと、頭に乗っていたユーノに手を伸ばして地面に置くと

「あぶねぇからなのはのとこに行っててくれ」

「悟空さん！あなたの見つけたジュエルシードだしボクは手伝ってもらってる身だからこの戦いに文句を言うつもりはないけど」

そういってユーノは悟空の目を強く見つめて

「絶対負けないで」

「あぁ！オラ行ってくる」

そしてついにこの広大な敷地内においていま、戦いの火ぶたが

「いくよ！」

「いくぞ！」

切って落とされた

「だぁーりゃぁー！」

「はぁー！」

同時に動き出した両者はまず互いの距離を縮めた、黒衣の少女は乗っていた木の枝から飛び降りるとそのまま重力に身を任せ悟空に落下した

対して悟空は、相手の獲物が斧だと確認すると背にある如意棒に手を伸ばして一気に引き抜いた

ガキン

お互いの武器がぶつかり合うと二人はそのままつば競り合いのような形になった

「くぅぅぅぅ（この子の武器、ただの木の棒だと思ってたけどすごい強度）」

「こんのぉ～」

二人の力は拮抗している．．．．ように見えた

「すごい悟空君あの子に全然負けてない！」

「確かにすごいけど、でもあのままじゃ」

ユーノが懸念したその時、二人は同時に後方へ飛び跳ね互いに武器を構えなおした

「おめぇ強ぇなぁ今のでわかったぞぉ！」

「あなたの方こそ、でも」

「「勝つのはこっちだ！」」

「バルディッシュ！」
［Ｓｃｙｔｈｅ　Ｆｏｒｍ］
「「はあぁ！」」
一気に駆け出した二人は互いに一閃、だが鎌状に変形したバルディッシュの黄色い刃に如意棒は
「「如意棒が・・・きれた！」」
悟空の持ってた如意棒は左右の手でもっているところからちょうど真ん中あたりから両断されていた
それを見た黒衣の少女は「これであなたの武器は無く「のびろぉー如意棒ー」」
悟空の手元を見て驚愕した、手ごたえはあった確実に切り裂いた、なのにどうして目の前の少年の武器は
「さっきよりも長く・・・っ！」
「だりゃぁー」
悟空は先ほどの倍近くにまで伸ばした如意棒で黒衣の少女めがけて上段からの振り下ろしを慣行、それに反応しきれなかった少女はそのまま
ゴン
「きゃっ」
小さい悲鳴をあげてその頭に如意棒の一撃を受けたのであった
「「あっ、なんかかわいい」」

茂みに隠れていたふたりはこの流れを見たときに聞こえた小さい悲鳴に、思わず出たのは何とも場違いなつぶやきだった

悟空の腕力は常人のそれを凌駕しているもののバリアジャケットを纏っているものあいてに、木の棒よりは強度があるぐらいの武器で殴ったとしてもその効果は微々たるものである、その結果

「あはは！でっかいたんこぶ！」

「わ、わらわないで」

漆黒の少女の頭の上にはこぶし大のたんこぶができていた、その痛さに思わず涙目になりながらたんこぶをさすっている姿はなんとも

「「なんだろう、ものすごく励ましてあげたい」」

周りにこのような感想を抱かせるには十分だった

だが、悟空の渾身の強打に涙目程度で済むこのバリアジャケットを見た悟空はその顔をみるみる笑顔に変えていき

「おめぇすげぇ頑丈だな！いまのでたおれねぇなんておでれぇたぞ」

「ふざけないで！この程度の攻撃、なんてこと・・・ない！」

「ん？そっかじゃあこれならどうだぁ！」

如意棒を左手を前、右手を後ろ側・・・如意棒の後端で握りなおした悟空はそのまま一気に右手を前方に打ち出す、所謂(いわゆる)突きの態勢に入った

「だだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだ！」

「うっ、このぉ！くっ！」

まるでマシンガンのように放たれた如意棒の連撃は一発の威力は落ちるものの、とにかく数が多かった秒間にしておよそ２０発の弾丸に漆黒の少女は捌ききれずに

「あ！とんだぁ！おめぇ空飛べんのか？」
「？あなたも魔導士なんだからこのくらい」
「ん？ん～～」

悟空は大変困っていた、目の前の少女の行動に・・・・ではなく

「なぁユーノ！『マドーシ』ってなんだぁ食いもんか！？」
「「「だぁぁぁ」」」

まず、言っている意味が分からなかった
白熱するバトルの最中にも関わらず悟空以外の三名はかなり盛大にズッコケた
それでも何とか立ち直ったユーノがすかさず説明に入った

「魔力の才能があって、魔法を行使する人のことを魔導士って言うんです！だから魔力素質のない悟空さんは魔導士じゃないんです！！」
「・・・・・・らしいぞ？」
「・・・・・・・・・・そう」

少女は持っている鎌・・・バルディッシュを強く握ると、そのまま悟空に向けて急降下し始めた

「はぁぁぁ！」
「く！このぉ！！」

上空からのバルディッシュによるヒット&アウェイに切り替えた少女はかなり優位に立っていた、なにせ制空権を取った上に相手は空を飛べないと来たものだ、それに

「こいつ、速ぇ！！」

少女は速かったのだ、それもまだ全力を出していないように悟空は思ったのである

「このままじゃこっちが先にまいっちまう！ん～そうだ！」

防戦一方の悟空は林の方に目を向けると何か考え付いたように声を上げると

「これで、終わり！！」

「いまだぁ！！」

「なっ！」

大振りになった一瞬の隙をついて悟空は後方へ大ジャンプ、そしてそのまま

「やーい、ジュエルミートが欲しかったらここまでおいでぇ！」

「林の中に消えた！？くっ待て！」

木々の枝の上を飛び移りながら移動する悟空はしなる枝の反動を加えて速度が上がっていた、ここら辺はさすが山育ちの野生児といったところであろうか

対して少女は障害物の多い林の中では思うように飛べず若干、その飛行速度を落としていた、だがついに

「はぁはぁ、やっと・・・見つけた」
「・・・・・・」
「これで本当に、終わり！！」

枝の上で隠れているつもりであろう目の前の少年はこちらに気付いていない、後ろから近付いた少女はバルデッシュを大きく、振りかぶった

ザン！！

小気味よい音をたてて目の前の『もの』を切り裂いた、そう、一本の枝を

「な！いない！どこに」

急に消えた少年に驚きの声を上げる、だが次の瞬間何かの気配を背中で感じた少女はそのまま後ろにバルディッシュを凪いだのだが

「へへーんこっちだよ～」「こっちこっち」「や～い」「どこみてんだぁこっちだぁ」
「こっちだって」「どーれだ？」

「な、なんなのこれ」

追いかけていた少年、悟空は居た黒衣の少女を囲むよう六人になって様々なポーズをとって少女を幻惑していた
目の前の事態に頭がついて行かず動きを止めてしまった少女しかし突然射した陰に反射的に上を向くと

「ここだぁーのびろぉー」
「く、このぉ！」
少女に向かって飛び上がった状態で如意棒を上段構えにしている悟空がいたが距離がどう考えてもあと一歩分、約６０センチ分足りてない
だが少女は思い出した、あの棒は伸びるということを
おもむろに右手を差し出し、その先にスフィアを生成した少女は
［Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ］
電気を纏った黄色い閃光を放った

「ダン！」　「ゴン！」

「ぐあぁぁぁぁぁ！」
「ぐぅぅぅ！！」
両者は相打ちの形となったのだが、悟空の如意棒は当たる直前に放たれたフォトンランサーの直撃により威力が大幅に減り、逆にカウンターを受けた悟空は電気の槍の直撃により後方へ吹っ飛んだ
「やった「ま、まだだぁ！」」
少女が勝利を確信して落ちていく少年を見下ろしたその時だった、
少年が空中でその落下の軌道を変えたのであった、『下から上へと』
落下していく途中にあった枝を悟空はその手足より長いしっぽで掴むとそのまま鉄棒の大車輪の要領で回転し
「いっけぇー」

「！！」

渾身の蹴りを放った

ばきばきばきばき

完全に意表を突かれた漆黒の少女はそのまま上に飛んでいき、そして木の枝を折りながら放物線を描き落下していった

「やっほぉー」

歓喜の声をあげながら地面に着地した悟空はそのまま走り出し、落下した少女に向かって手を差し出した

「おめぇ強ぇな、それにまだ本気を出してねぇだろ」

「え？」

最初の会話と飛べないという事実を見た少女は無意識のうちに力を出さないでいた

なにより空を飛んだ時点でプラズマランサーを打ち続けていればおそらくは別の展開になっていたのかもしれない、だが

「・・・たしかにわたしはあなたに、・・・あな、た、に・・・・・」

「ん？」

手心を加えていたかもしれない、そう言おうとした漆黒色に飾られた少女のそれも顔面だけが一気に真っ赤に染まった

「っ！」

「どうしたおめ「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」うわぁ」

立ち上がった少女は悟空を見た途端突然悲鳴を上げるとあろうことか悟空を突き飛ばしたのである
そこにやっと追いついたなのはとユーノが表れて

「悟空さん！やっとおいつきました、って！」
「悟空君！もうどこに、いっちゃ、てる．．．．」
「おう！なのは、ユーノおそかっ「いやぁっぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」なんだよおめぇまで」

なのはまでもがその顔を瞬間沸騰させたのである

「ご、ごごごごごっ悟空君！ふっふ服が」
「悟空さん、なんで裸なんですか？」
「服？あぁ！オラの道着が！？」

顔をそむけて必死に指を差してくるなのはと悟空の目の前まで近づいてありのままを伝えるユーノに悟空は自分の恰好を見る
さっきのプラズマランサーの直撃の時だろう、その時に服の大部分が燃えて消失してしまい今にいたるのである、そして悟空は

「まぁいっか！」
「「「いや、よくないから！！」」」

なんでもないという感じの悟空に今度は三人が叫んだ

「なぁ？おめぇまだやるか？」
「いや、その今日はもう」
「そっか、じゃあよまた今度だな」
「え？」

悟空の姿を見まいとその顔を真っ赤に染めながらそむけている少女は少し意外そうな顔をしてる少女に悟空は右手を差し出して

「そんじゃ約束だもんな！ほれ、ジュエルミート！欲しかったんだろ？」
「え！？でも勝負は・・・！！」

これはとりあえず引き分けなんじゃないか？そう言おうとして悟空のほうを向いた少女はあわてて顔をそむけた
そんな少女を見た悟空は少しだけ頭をかしげて

「ちゃんとしたろ？最初によ、『オラと戦ってくれたら』こいつ渡すってよ」
「！！」
「おめぇなんていうんだ？」
「え？」
「また会うんだからよ、名前くらいしらねぇとよ！」
「でも、その、わたしは「オラ孫悟空ってんだ！」・・・ソンゴクウ？」

思ってもみなかった展開に少女は戸惑っていると悟空の方から自己紹介を始めた
そして隣にいる女の子・・・・なのはとその子の肩に乗っているフェレット、ユーノのことを言い終わると

「んでおめぇのなまえは？」
「・・・・・・・・フェイト」
「ん？聞こえねぇぞ」

ぼそっと言った感じの声にもう一回といった感じの悟空に

「わたしはフェイト・テスタロッサ！その・・・・」
「そっか！おめぇフェイトっていうのか、よろしくなフェイト！」
「あ、あのこれ！ジュエルシード・・・・・・・ありがとう」

そういったとたん少女・・・フェイトは空のかなたに飛んで行ってしまった
それを見た悟空は

「よし、帰ぇるか！」

そういって月村家のほうへ歩いていく。

ちなみにこのあと全裸で堂々と帰ってきた悟空に対してすずかとアリサは悲鳴をあげ
待っていたネコたちは歓喜の悲鳴をあげ
忍、ノエル、ファリンの三人は汚れだらけの悟空を風呂に放り込んだのであった

スピード対スピード、発動！残像拳（後書き）

悟「オッス、オラ悟空！」

なの「謎の女の子、フェイトちゃんとの激闘を終えた悟空君でしたが、高町家ではある計画が進行してました」

悟「さすがに今日はもうクタクタだぞぉ」

なの「疲れ果てた悟空君に迫るその計画とは」

悟「次回　魔法少女リリカルなのは～遥かなる悟空伝説～第９話
一色即発！旅館であった二匹の獣」

なの「悟空君大変！旅館の食材がもうないって！！」

悟「えぇ～オラまだ食い足りねぇぞぉ」

ユーノ「また見てくださいね」

一触即発！旅館であった二匹の獣（前書き）

ついに温泉回です
先に言っておきますポロリはありませんごめんなさい
ではどうぞ

一触即発！旅館であった二匹の獣

第９話　一触即発！旅館であった二匹の獣

高町家　時刻は１８時３０分、フェイトとの戦闘を終え月村家から帰宅してきた
なのは、ユーノ、悟空の三名は玄関前で困っていた
ことの発端は、帰り際の筋斗雲での悟空の一言

「なぁ？そういえば恭也も一緒に来るっていってたよな」

この発言によりなのはとユーノは一言も発せずただ黙りこみ
悟空はそんな二人を見て頭をかしげていた

「なぁさっさとはいらねぇかぁ？オラ腹減っちまったぞぉ」
「だ、だめだよ悟空君！まだ、その、心の準備が！！」
「そ、そうだねなのは、ボクもまだ心の準備が」
「変なやつだなぁ、自分ちに帰ぇるだけだってのになんでそんなもんがいるんだ？」

うっすらと汗をかき、小刻みに震えているあからさまに様子がおかしい二人を見た悟空は、
何のためらいもなく玄関のドアを開けた
そしてその先には

「やぁなのは、悟空、遅かったね？おかえり」

悟りを開いた聖人（恭也）がいた

「お兄ちゃん、ただいま・・・・？」
「おう、キョウヤ！今帰ったぞ」

あまりにも神々しい光を放つ兄に違和感を通り越し、不信感を抱いているなのはは口元を引きつらせて
その光を見た悟空は「キョウヤおめぇ少しみねぇ間にずいぶんつよくなったなぁ」などと恭也の放つ輝きに別解釈を取るのであった
そんな恭也はおもむろに悟空の肩に両手を置くと

「悟空、お前のことだ、やましいことなんて何もなかったに違いない・・・だがあえて言おう、なのはの事を・・・・・・・・・・・・頼んだぞ！」
「？おう、任された」
「ちょっ！お兄ちゃん何言ってるの！？」
「じゃあ邪魔者はさっさと消えるよ　あはははははは！」

頭のネジが2、3本ぐらい考えすぎによる締めすぎでねじ切れてしまっている（つまり取り返しがつかない）恭也は道場の方へと消えていった

そして夕食時（戦争の時間）　いつものように高町家のオーナーシェフである桃子と
胃袋が虚数空間の悟空による夕飯（バトル）が終わると、そのままちょっとした家族会議になった
ちなみに恭也は何となく元の調子に戻り、
悟空の衣服が道着から白いTシャツに灰色のズボンになっているのは、なのはの「屋敷を走りまわっていたら猫たちにもみくちゃにされて汚れちゃったから・・・・・そう！イメチェン」という無理すぎるゴリ押しで何とか押し切った

「じゃあさっそく本題なんだけど、今度の連休に恒例になってる2泊3日の旅行に行こうかと思うんだ」
「そっかもうすぐだもんね！」
「忍たちにはもう連絡を入れてあるよ父さん」

士郎が本題を切り出すと美由希は数日にひかえた旅行に胸を躍らせ、恭也は事前にアリサと月村家に連絡を入れている周到さだった
それを見ていた悟空はしっぽを振りながら桃子の方を向いて張ったおなかをたたきながら

「なぁモモコ？どっか行くんかぁ？」
「えぇそうよ、悟空君は温泉って入ったことある？」
「おんせん？ん～たぶんねぇぞ」

温泉という聞きなれない単語に悟空は首を傾げ
それを見た桃子は優しく笑い、悟空の頭を撫でていた

そして旅行当日

「「「わぁ～」」」
「ここがおんせんかぁ～」
（ボクもはじめてきたなぁ）

高町家に月村家そしてアリサを加えた１０名プラスαは海鳴温泉に到着していた
少女たちはこれからの予定に胸をふくらませていた、その横で悟空はユーノにあるお願いをしていた

「悟空さん、何かとっても嫌な予感がするんです・・・そうボクの名誉にかかわるそんな一大事が、だからお願いですボクからはなれないでぇ～！」
「よくわかんねぇけどこれでいいんだろ？」

そういってユーノの首根っこをつかんだ悟空はそのまま自分の頭の上に乗せると

「シロぉ～モモコぉ～オラ先に風呂入ってくるぞぉ」
「お、そうか気を付けていってくるんだぞ」
「あら悟空君、ちょっとまって」

士郎と桃子に向かって一言告げた悟空はそのまま風呂場に行こうとするのだが
音符を浮かべている桃子に待ったをかけられ悟空は急停止した
すると美由希がなのは達の方を向き怪しく笑うと

「ここのお風呂って１０歳未満の子ならどちらにでも入れるんだけど悟空君こっち（女湯）こない？」
「「「えぇぇ～！！」」」

でかい爆弾を落としていった

「だ、だめだよそんなの！」
「そ、そうよだめよ！」
「は、はずかしい・・・」

なのは、アリサ、そしてすずかの３人はあわてて首を振る
そしてそこについにあの男が立ちはだかった

「悟空・・・なのはを、なのはを頼んだぞ！」
「お兄ちゃんがこわれちゃった～」

3人に、味方は居なかった
そんな光景を眺めていた月村家の長女、忍はふと疑問におもった

「ねぇ恭也？悟空君っていくつなの？」
「えっそりゃなのはと同じくらい・・・そうだろ？父さん」
「ん～そういえば聞いてないような」

そうこの集団はここにきて今までが今までだったのでそんな些細なことまったく気にも留めなかったし、背格好からしてなのはと同じくらいだと思っていた
そんな彼らでも一度膨らんだ疑問というのは中々しぼまず、むしろ膨張していき

「悟空、おまえいま歳いくつだ？」

高町家が長男、高町恭也がいまこの疑問を解決しようと未開の地（悟空の歳）に踏み込んだ

「オラかぁ？」
「あぁ！」
「オラぁ・・・」

悟空はおもむろに両手を開きなにかを数え始めた
旅行参加者一同はその様子を息をのみながら見守る、そして

「えっとぉこないだ占いババとカリンさまと神様にいわれたのがぁ

〜えぇとえっと」

「「「「「「「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・ごくり」」」」」」」」」」

そしてついにおぼつかない計算？を終えた悟空は恭也の目を見てはっきりと言った！

「オラ16歳だ！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・へ？

世界がとまった

別にどっかの魔導士たちが本を完成させようと結界を張っているわけではなく

ただ単純になのはたちの体感時間が引き伸ばされているだけなのだが、いまこのときはそんな理屈はどうでもよく、ただただこの目の前の少年の放ったギャリック砲張りの破壊力を持った一言に呆然としていた

「ん？ていうとオラそっちにいけねぇな、じゃあオラこっち（男湯）いくからぁまたなぁ！」

そんなことなどお構いなくさっさと脱衣所に向かった悟空は頭の上で置物になっているユーノに「なにしてんだぁさっさと入っちめぇぞ」というと首根っこをつかんではトテトテと脱衣所に入ってしまった

「「「「「「「「「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」」」」」」」」」

この日、海鳴市で震度2弱の地震が観測されたとか

「ふぇ～いい湯だなぁ！」
「そ、そうですね悟空さん」

いまだ外で驚愕の声を上げ続けるなのは達を余所にのんびりとひのきの湯につかっている悟空に、ユーノはいい機会だと思いさっきのことも含めていろいろと悟空に質問した

「最近なのはの家に来たって言ってたけど・・・」

「あぁ、目が覚めたら道場にいたぞ」

「あの夜の砲撃魔法って」

「ん？かめはめ波のことか？あれは亀仙人のじっちゃんが」

「あの黄色い雲って」

「筋斗雲か？あれも亀仙人のじっちゃんが」

など、ユーノは今まで聞けなかったことを一気に聞いていくそれでわかったことといえば

「たぶん悟空さんは次元漂流者なんですよ、きっと」

「じげんひょ、ひょ？」

「次元漂流者、つまり悟空さんはボクと同じでこの世界の人間じゃないってことですよ」

「ふぅーんそうなんかぁ」

そして最後に何となく聞いてみようと思ったことがあった、それは

「悟空さん、その寂しくないんですか？元の世界に残してきたご家族とか心配じゃないんですか？」

至極当然の質問であったろういくら１６歳といっても親許を離れれば寂しくもなるはずである、しかしそのユーノの疑問は

「ん？オラ家族いねぇぞぉ」
「え！じゃ、じゃあお亡くなりに？」
「オラが赤ん坊のころ山で捨てられてたのをじっちゃんが拾ってくれたんだ」
「・・・・・・・その、すみません」

かなりの大きさの地雷だった・・・・そう、本来ならば

「よっしそろそろ上がるかぁ！オラはらぁへっちまった！」
「は、はい！」

かなり暗い過去のはずなのにまったくと言っていいほどに気にした素振りを見せない悟空の、不思議な暖かさを感じさせる笑顔をみたユーノは勢いよく悟空の後を追ったのであった

旅館　縁側
風呂上がりのなのはたちはいまだにさっきの爆弾発言の話題に盛り上がっていた

「悟空君・・・悟空さん、ほんとに１６歳なのかな？全然信じられないよ」
「まったくそうよね！ほんとびっくりしちゃったわよ」
「でも確かに、うちのクラスの男子のみんなと比べると・・・くらべると」

すずかは悟空について考え込んでいた
最初にあったときの『目があった』あの一瞬の出来事と、１６歳という年齢の割にあの子供体型

もしかしたら『こちら側の』人間なのではないか、そんな思考が頭の中を巡っていたが

「はぁーい、おちびちゃんたち！」

突然の声にその思考は中断された

「君かねぇ、こっちの邪魔をしているがきんちょってのは？」

「え？」

声の主はオレンジ色の長い髪をたなびかせた十代後半ぐらいの女性だった

その女性はなのはの方に近づくと、そっと顔を近づけ

「あんまり強そうでもかしこそうでもな「あ、こんなとこにいたんか」い？」

嫌な雰囲気に包まれたなのはたちだったが、それをぶち壊すは

「悟空く・・・さん」

「へぇあれが、・・・！！」

悟空は目の前の女性をみつめると

「？ん～たしかどこかで」

「おや？ど、どこかであったことがあるのかい？」

「あっそだ！今から飯食うんだおめぇもこっち来いよ」

悟空はいきなりその女性となのはの腕をつかむとそのまま歩いていく

「ちょっと、どこに行くんだい（このガキ思ったより力が強い？）」
「ご、悟空さんそんなひっぱらないでよぉ～」
「モモコがよぉ飯食うんだったらなのはたち連れて来いっていうからよぉ」
「だからってなんでアタシまで」
「まぁいいから来いって！」

抵抗するオレンジ髪の女性だが見た目以上に強い力で引っ張っていく悟空に引きずられるように連れて行かれる　しかし

（アタシの野生の感が告げてる、なんでかわからないがこいつについて行った方がいいって）
目の前の少年にどこか敵意を向けられない女性であった

「すずかぁ、アリサーおめぇらも早く来いよー」
「ちょっと待ちなさいよー」
「あ、いまいきます！」

そして戦争が始まる

がつがつがつがつ

「な、なんだいこりゃ」

もりもりもりずずずずずぅ～

「本当にこれ全部食う気かい？いくらなんでも」

ぼりぼりぼりぼり

「おいおいウソだろ？」
「ふぃ～食った食った！」
悟空は出された料理の８割を食い尽くしたところで手を止めた、そして
「なぁ？おめえもくわねぇんか」
「いや、アタシはもう十分だよ」
そういったオレンジの女性は部屋から出ていこうとするが
「なぁこれあいつにも持ってってやってくれねぇか？」
悟空は机の上に置いてあった肉まんを5個当たり袋に詰めると、それを差し出した
「あ、あいつって？」
「ん？なんだおめぇフェイ・・・・・んぐ！」
「ちょっと待ちなあんた！どうしてアタシとフェイトのこと？」
いきなりとんでもない発言をする悟空の口をふさいで廊下に出ると女性は鋭い目つきで抱えた悟空を睨みつけた
「このあいだあった時によあいつからおめぇの匂いがしてよ？そんでおめぇからもあいつの匂いがしたからよぉ」
「たった、それだけ？」
「おう、そうだぞ！」
この回答に驚いた彼女は悟空を床に降ろすと、悟空の目線に合わせるようにしゃがみこむ

「はぁ、まったくあんたには驚かせっぱなしだよまったく」
「へへっ！そうか？そんでよどうすんだ？」
そういって再び差し出した肉まん入り袋をかかげる
「わかったよ、もらっといてやるよただし」
「ん？」
「次に会ったら敵同士だ！」
「おう、いいぞ！フェイトにもよろしくな」
そう言ってふたりは互いに目線を合わせたあと、お互い反対方向に歩いて行った
「ねぇ悟空君？さっきの人は？」
「なんか、用事が出来たから帰ぇるみてぇだぞ？」
桃子の問いかけに悟空はさらっと返すとさっき自分が入ってきた扉に向かってにっこりと
笑うのであった

一触即発！旅館であった二匹の獣（後書き）

悟「オッス！オラ悟空」

なの「夜中に突然あらわれたジュエルシードの反応、でも悟空さんはとってもうなされていて」

悟「や、やめろぉー」

なの「だからわたしは一人で行くことに決めました！次回　魔法少女リリカルなのは～遥かなる悟空伝説～第１０話　悟空に異変！？溢れ出した力は止まらない」

悟「はぁぁぁぁ！！」

なの「悟空さん．．．悟空くぅーん！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1124ba/

魔法少女リリカルなのは〜遥かなる悟空伝説〜

2012年1月10日03時46分発行